

令和五年度

前期日程

国語問題 (H・F・J・E)

〔注意〕

- 一、問題冊子及び解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 二、受験番号は、解答用紙の受験番号欄(計六か所)に正確に記入すること。
- 三、問題冊子のページ数は、表紙を除き合計十六ページである。脱落している場合は直ちに申し出ること。
- 四、解答用冊子には解答用紙三枚と白紙一枚が一緒に折り込まれている。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 五、解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 六、問題冊子の下書き欄及び余白は、適宜下書きに使用してよい。
- 七、解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 八、問題冊子及び白紙は持ち帰ること。

令和5年度 一般選抜

問題訂正

【 前期日程 国語（H・F・J・E） 】

12ページ 3行目を1文字分、上に詰める

(誤) 「^(注1)松尾桃青が、

馬に寝て残夢月遠し茶の烟

の句は、眉山が早行の詩の「馬上続残夢」といふ句を・・・」

(正) 「^(注1)松尾桃青が、

馬に寝て残夢月遠し茶の烟

の句は、眉山が早行の詩の「馬上続残夢」といふ句を・・・」

次の文章を読んで、後の問い(問一～問五)に答えなさい。

二〇五〇年に雇用市場がどうなっているか、私たちには想像もつかない。だが、機械学習(注1)とロボット工学によって、ヨーロッパの製造からヨガの指導まで、ほぼすべての種類の仕事に変化するだろうことに関しては、みんなの意見がおおむね一致している。とはいえ、その変化がどのような性質のものかや、どれほど差し迫っているかについては、見方が分かれる。わずかに一〇年あるいは二〇年のうちに何十億もの人が、経済的な意味で「ジョウ人員(a)となると考えている人もいる。逆に、長期的に見ても、自動化は新たな雇用を生み出しながら、全員におおいなる繁栄をもたらし続けると主張する人もいる。

……(中略)……自動化が大量失業をもたらすという恐れは一九世紀にさかのぼるが、これまでのところ、現実になってはいない。産業革命が始まって以来、機械に一つ仕事が奪われるたびに、新しい仕事は少なくとも一つ誕生し、平均的な生活水準は劇的に向上してきた。それにもかかわらず、今回は違い、機械学習が本当に現状を根本から覆すだろうと考える、もったいな理由がある。

人間には二種類の能力がある。身体的な能力と認知的な能力だ。過去には機械は主にあくまで身体的な能力の面で人間と競い合い、人間は認知的な能力の面では圧倒的な優位を維持していた。だから、農業と工業で肉休労働が自動化されるなかで、人間だけが持っている種類の認知的技能、すなわち学習や分析、意思のソツウ(b)、そして何より人間の情動の理解を必要とする新しいサービス業の仕事が出現した。ところが今や人工知能(AI)が、人間の情動の理解を含め、こうした技能のしだいに多くで人間を凌ぎ始めている。人間がいつまでもしっかりと優位を保ち続けられるような、(身体的な分野と認知的な分野以外の)第三の分野を、私たちは知らない。

¹⁾ AI革命とは、コンピューターが速く賢くなるだけの現象ではない。それに気づくことがきわめて重要だ。この革命は、生命科学と社会科学における飛躍的發展によっても勢いづけられる。人間の情動や欲望や選択を支える生化学的なメカニズムの理解が深まるほど、コンピューターは人間の行動を分析したり、人間の意思決定を予測したり、人間の運転者や銀行家や弁護

士に取って代わったりするのがうまくなる。

過去数十年の間に、神経科学や行動経済学のような領域での研究のおかげで、科学者は人間のハッキングがはかどり、とくに、人間がどのように意思決定を行うかが、はるかによく理解できるようになった。食物から配偶者まで、私たちの選択はすべて、謎めいた自由意志ではなく、一瞬のうちに確率を計算する何十億ものニューロンによってなされることが判明した。自慢の「人間の直感」も、実際には「パターン認識」にすぎなかったのだ。優れた運転者や銀行家や弁護士は、交通や投資や交渉についての魔法のような直感を持っているわけではなく、繰り返し現れるパターンを認識して、不注意な歩行者や支払能力のない借り手や不正直な悪人を見抜いて避けているだけだ。また、人間の脳の生化学的なアルゴリズムは、完全にはほど遠いことも判明した。脳のアルゴリズムは、都会のジャングルではなくアフリカのサバンナに適応した経験則や手っ取り早い方法、時代遅れの回路に頼っている。すぐれた運転者や銀行家や弁護士でさえ、ときどき愚かな間違いを犯すのも無理はない。

これは、「直感」を必要とするとされている課題においてさえAIが人間を凌ぎうることを意味している。もしあなたが、AIは神秘的な「勘」に関して人間の魂と競う必要があると考えているのなら、AIには勝ち目はないだろう。だが、もしAIは、確率計算とパターン認識で神経ネットワークと競うだけでいいのなら、それはたいして手強い課題には思えない。

とくに、AIは他者についての直感を求められる仕事では人間を凌ぎうる。歩行者がいつぱいの通りで乗り物を運転したり、見知らぬ人にお金を貸したり、ビジネスの取引の交渉をしたりといった、多くの仕事は、他者の情動や欲望を正しく評価する能力を必要とする。あの子どもは今にも車道に飛び出そうとしているのか？ スーツを着たあの男性は、私からお金を巻き上げて姿をくらますつもりなのか？ あの弁護士は替し文句を実行に移すつもりか、それとも、はったりをかけているだけなのか？ そうした情動や欲望は非物質的な霊によって生み出されていると考えられているときには、コンピューターが人間の運転者や銀行家や弁護士に取って代わることがありえないのは明白に思えた。というのも、神が創りたもうた人間の霊を、コンピューターが理解できるはずがないからだ。ところが、じつは情動や欲望が生化学的なアルゴリズムにすぎないのなら、コンピューターがそのアルゴリズムを解読できない理由はない。そして、それをホモ・サピエンスよりもはるかにうまくやれ

ない道理はない。

歩行者の意図を予測する運転者や、お金を借りようとする人の信頼性を評価する銀行家や、交渉の場の雰囲気を読む弁護士は、魔術を頼りにしたりはしない。本人は気づいていないが、彼らの脳は、表情や声の調子、手の動き、さらには体臭まで分析して生化学的なパターンを認識している。適切なセンサーを備えたAIなら、人間よりもそのすべてをはるかに正確かつ確実にやっつてのけられるだろう。

したがって、雇用の喪失の恐れは、情報テクノロジー(IT)の興隆からのみ生じるわけではない。ITとバイオテクノロジーの融合から生じるのだ。^(注4) 機能的磁気共鳴画像法(fMRI)スキャナーから雇用市場までの道は長く曲がりくねっているが、それでも数十年のうちにはたどり終わられるだろう。今日、脳科学者が扁桃体(へんとうたい)と小脳について突き止めている事柄が、二〇五〇年にはコンピューターが人間の精神科医やボディガードを凌ぐことを可能にするかもしれない。

このようにAIは、人間をハッキングして、これまで人間ならではの技能だったもので人間を凌ぐ態勢にある。だが、それだけではない。AIは、まったく人間とは無縁の能力も享受しており、そのおかげで、AIと人間との違いは、たんに程度の問題ではなく、種類の問題になった。AIが持っている、人間とは無縁の能力のうち、とくに重要なものが二つある。⁽³⁾ 接続性と更新可能性だ。⁽⁴⁾

(中略)

たとえば、多くの運転者は、次々に変わる交通規則をすべて熟知しているわけではなく、しばしば違反する。そのうえ、それぞれの乗り物は独立した存在なので、二台の乗り物が一つの交差点に近づくとき、運転者は自らの意図を伝えそこね、衝突することもありうる。一方、自動運転車はすべて接続しておくことが可能だ。接続した自動運転車が二台、一つの交差点に近づくとき、両者は実際には二台の別個の存在ではなく、単一のアルゴリズムの一部だ。したがって、両者が自らの意図を伝えるそこねて衝突する可能性は、はるかに低い。そして、交通を管轄する官庁が交通規則を変更することにしたなら、自動運転車はすべて完全に同時に、たやすくアップデートでき、プログラムにバグがないかぎり、どの車も新しい規則を厳密に守

る。

同様に、もし世界保健機関(WHO)^(c)がシッペイを認定したり、研究所が新薬を開発したりしたら、こうした進展を世界中の人間の医師全員に知らせることは不可能に近い。それに対してたとえ世界中に一〇〇億のAI医師が存在し、それぞれが一人の人間の健康状態をモニターしていたとしても、そのすべてを瞬間にアップデートでき、それらのAI医師はみな、新しいシッペイや薬についての自分のフィードバックを伝え合える。このような接続性と更新可能性の潜在的なオンケイ^(d)はあまりに大きいので、少なくとも一部の職種では、すべての人間をコンピューターに取って代わらせることが理に適っているかもしれない——たとえ個別には、機械よりも腕の良い人間がいくらいたとしても。

個々の人間をコンピューターネットワークに切り替えたら、個別性の利点が失われるとして、異論を唱える人がいるかもしれない。たとえば、一人の人間の医師が判断を誤っても、世界中の患者を殺すこともなければ、すべての新薬の開発を妨げることもない。それに対して、もし医師全員が本当は単一のシステムにすぎず、そのシステムが間違いを犯せば、大惨事になりかねない。とはいえ実際には、統合されたコンピューターシステムは、個別性のオンケイを失わずに接続性の利点を最大化しうる。同じネットワークで多くの代替アルゴリズムを動作させることが可能だ。だから、辺鄙な密林^(e)の中の村にいる患者は、自分のスマートフォンを使って、単一の権威ある医師ではなく、実際には一〇〇の異なるAI医師にアクセスできる。それらのAI医師の相対的な実績は、絶えず比較されている。^(注5)IBMの医師に言われたことが気に入らなかつた？ 大丈夫。たとえあなたがキリマンジャロの斜面のどこかで立ち往生していたとしても、いとも簡単に^(注6)百度の医師と連絡を取って、セカンドオピニオンが聞けるから。

おそらく、人間社会が受けるオンケイは計り知れない。AI医師は何十億もの人に、これまでよりもはるかに優れた医療をはるかに安く提供できるだろう。とくに、現在は何の医療も受けていない人々には。学習アルゴリズムと生^(f)体センサーのおかげで、発展途上国の貧しい村人さえもが、現在、世界で最も裕福な人が最も進んだ都会の病院で得るものよりも格段に優れた医療を、スマートフォンを通して享受できるようになるかもしれない。

同様に、自動運転車はこれまでのものをはるかに安く輸送サービスを人々に提供できるのではないか。とくに、交通事故の死亡率を下げられるだろう。現在、交通事故で毎年一二五万人近くが亡くなっている（これは戦争と犯罪とテロで死亡する人の合計を上回る）。これらの事故の九割以上は、いかにも人間らしい過失が原因だ。飲酒運転をする人もいれば、運転しながら電子メールを送っている人や、居眠り運転をする人、道路に注意を向ける代わりにぼんやりと空想に耽^{ふけ}っている人もいる。……（中略）……自動運転車なら、こういうことはいつさいない。もちろん自動運転車特有の問題や制約はあるし、避けられない事故もあるが、人間の運転者をすべてコンピューターに替えれば、交通事故による死傷者の数がおよそ九割減ることが見込まれている。言い換えると、自動運転車に切り替えれば、おそらく毎年一〇〇万人の命が救われる。

したがって、人間の仕事を守るためだけに、交通や医療のような分野での自動化を妨げるのは愚行だろう。なにしろ、最終的に守るべきなのは、職ではなく人間なのだから。ヨジョウになった運転者や医師は、何か他にすることをみつけるしかない。

（ユヴァル・ノア・ハラリ『21 Lessons——21世紀の人類のための21の思考』柴田裕之訳 河出書房新社

二〇二二年より。出題の都合により、一部改変した箇所がある。）

（注1） 機械学習 機械（コンピューター）が経験からの学習を通じて自らを改善していくコンピューターアルゴリズムのこと。

（注2） ハッキング ここでは脳などの人体の仕組みや働きを解明し、それによって人間の選択や感情を予測したり操作したりすること进行。

（注3） アルゴリズム ある問題や課題を解決するための計算や処理の手順のこと。

（注4） 機能的磁気共鳴画像法（fMRI） 強い磁石と電磁波を用いて体内の状態を断面像として描写する検査法により脳の活動を調べる方法のこと。

(注5) IBM アメリカに本社を置く多国籍IT企業。

(注6) バइटゥ 百度 中華人民共和国に本社を置く多国籍IT企業。

問一 傍線部(a)～(d)のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部(1)について、AI革命とは、コンピューターが速く賢くなるだけでなく、さらにどのような現象でもあるのか。「コンピューターが 現象でもある。」という文になるように、本文中の五〇字から六〇字(句読点を含む)の箇所をそのまま抜き出して、 を埋めなさい。

問三 傍線部(2)について、著者はなぜそのように考えるのか。その理由を一二〇字以内で述べなさい。

問四 傍線部(3)について、AIの「接続性」とは何か。本文の内容をふまえて五〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部(4)について、AIの「更新可能性」とは何か。本文の内容をふまえて二五字以内で説明しなさい。

II

次の文章を読んで、後の問い(問一～問三)に答えなさい。

「たとえ話」はしばしば非科学的だとされる。確かに、たとえ話だけでは科学は成立しない。社会学でも、質的・量的調査の手法によってデータや資料を集め、既存の理論の検討を通じて構築された仮説を検証するという研究の進め方が標準的なものとされている。

だが実際には、そのようにして集めた情報を整理・分析して概念化・理論化していく際に、メタファーを用いた思考は有効である。社会学者ジョン・アリーが指摘したように、かつての社会「有機体」論から、「交換」「視角」「建物」構造など、様々なメタファーが社会学の理論構築に活用されてきた。あるいは「生態系(エコロジー)」「法則」「複雑系」といった、自然科学の概念のアナロジーを用いた理論構築の試みも行われてきた。目の前の事象の記述や分析から一歩離れ、その事象がより広い社会的文脈のなかでどのように位置づけられているのか、そしてそれが自分自身とどのように関わっているのかを考える際、メタファー的思考は豊かな想像力の源となる。

たとえばアリーは、グローバリゼーションという社会現象を理解する際に、「移動」をイメージさせるメタファー、特に「フロー(流れ)」と「ネットワーク(あるいはスケイプ)」という言葉の有効性を強調した。これらに類似する言葉はグローバリゼーションをめぐる議論において、しばしばそれがメタファーだと気づかれないほどに頻出する。「流れ」は、人、モノ、カネ、情報等の国境を越えた頻繁な移動の過程を表現している。それに対して「ネットワーク」はそれらの流れを方向づけ統制するために作られる制度、いわば「水路」というイメージである。このようなメタファーを用いることで、政府や企業などが「流れ」を「水路」によって制御しようとするという関係を明確に想像できる。そして川の流れがしばしば水路の堤防を越えて氾濫するように、人、モノ、カネ、情報等の流れも、しばしばネットワークの制御の限界を超えて氾濫する。⁽¹⁾ 国境を越える難民の激増、輸入品の優位による国内産業の衰退や低賃金労働者の流入による国内労働市場の条件悪化、世界的な金融危機、SNSを媒介にして引き起こされる反政府・市民運動といった現象が、それにあたる。そして洪水の後、残された堆積物によって水路の流

れが変わっていることがあるように、ネットワーク自体がフローによって変えられていくこともある。

テッサ・モーリス・スズキは、既存の国境線を自明視した「地域(国家)」を前提とした地域研究のあり方に異議を申し立てた。そして「地域(国家)」を、外部から絶えず流れ込んでくる人・モノ・カネ・情報のおびただしい「流れ(フロー)」が合流して形成される「渦」と見なす分析視角を提唱した。「渦」の内側と外側には境界が形成されるが、それは「流れ」の変化によって絶えず変わるし、「渦」の内部のあり方も常に変化する。そうしたグローバル化の進展は、「流れ(フロー)」を加速・増量させている。モーリス・スズキの言う「渦」とは、制御しきれない人・モノ・カネ・情報等の移動としての「流れ(フロー)」が、人々の住む空間/場所、すなわち領域性に影響を与えていくありさまを表現したメタファーである。

この「渦」というメタファーに私が付け加えたいのは、水の底に沈殿していた堆積物が「渦」によって巻き上げられていくイメージである。この場合、「堆積物」とは「流れ」が以前もたらした歴史や集合的記憶のことである。古い堆積物が新しい渦によって水面近くに浮上し、新しく流れ込んだものと混ざり合い、それまでと継続していつつ少し異なった堆積物が再び沈殿していく。それは、ある場所の集合的記憶が現代の出来事によって呼び覚まされ、再解釈され、歴史が語られ直されていくプロセスを表現している。それは保莉実の言う、私たちが日常において行う「歴史実践」であり、また歴史学や外交、政治の舞台で練り広げられる、歴史の解釈をめぐる論争でもある。

このように、メタファーを適切に用いることで、私たちは社会や歴史の成り立ちや、そこで起こっている現象を具体的なイメージとともに理解することが可能となる。しかしもちろん、メタファーも濫用すれば、実際の出来事とイメージの乖離乖離をもたらしかねない。地理学者のドリーン・マツシーは、人文社会科学者が自然科学の概念を比喩的に用いて自説を正当化しながらに警鐘を鳴らした。それでも彼女自身が実践しているように、メタファーで考えることは、そうでなければ結びつかない多様な思考や発想を結びつけ、交流させることで新たな視点をもたらすこともある。したがって、社会現象を理解する際にメタファーをいかに的確に用いることができるかが問われる。つまり、それは単なる「言葉遊び」になっただけではない。

メタファーを使った社会的思考と言葉遊びの境界線はいつも曖昧であるが、言葉遊びにならないためには、そのメタ

フアーは少なくとも実証的・論理的な経験・考察にある程度まで裏付けられていなければならない。ただし、メタフアーが社会学的思考でありうる条件はそれだけではない。そもそも、私たちはメタフアーの表現を、自分の考えていることをほかの誰かにわかりやすく伝えるために用いる。それゆえ、メタフアー的思考には、そのメタフアーが他者に伝わったときに他者がどのように解釈するかを、あらかじめ考慮することが含まれる。それが十分にわかりやすいものなら、そのメタフアーの表現を受け取った相手はそれに刺激され、新しい思考と表現を加えて自分に返してくれるだろう。それに、いかにして応答するか。つまり、その人が社会と他者への「真摯さ(truthfulness)」を伴う強勢で臨む限り、メタフアー的思考は私たちの想像力と対話可能性を広げていく。

「流れ」「ネットワーク」「渦」といったメタフアーで表現されるグローバリゼーションは、誰もが聞いたことがあるが、定義が曖昧なままに使われることが多い。それはつまり「世界が分断しながらひとつになる」という、一見すると矛盾する過程である。もう少し詳しく定義すれば「資本主義市場経済の拡大とともに国境を含むあらゆる境界がゆらぎ、世界中で政治・経済・社会・文化の相互浸透・相互依存が進行しながら、それが対立や葛藤を生み出していく過程」となるだろうか。この定義が意味するところについては次章で詳しく述べるが、本章ではメタフアー的思考をもう少し続けて、グローバリゼーションという社会変動のイメージを明確にしてみる。

グローバリゼーションは、政治・経済・社会・文化の領域で同時進行している。それゆえもつとも広く捉えれば、それは私たちを取り巻く「時代の流れ」そのものである。この時代潮流に対する評価は、論者によって多様である。チャールズ・レマートらは、グローバリゼーションに関する社会科学的な議論を①(親)グローバリスト、②反グローバリスト(懐疑論者)、③トランスフォーマリスト(変革主義者)、④ポスト(ラディカル)・グローバリストに分類した。①は、グローバリゼーションを主に経済面から捉え、一体化したグローバル市場の形成を不可避かつ基本的には望ましいものとして、それに対応するための国家・企業・個人の改革を説く。それに対して②は、グローバリゼーションと呼ばれる現象は決して現代に特殊なものではない

と考え、そうした潮流に反旗を翻す。一方、③と④はグローバルゼーションを経済的側面のみならず社会・文化・政治のすべての側面における大きな変化であり、抗うことが難しいことを強調する。そのうえで、③はグローバルゼーションを、「前期近代」の社会で発生した様々なリスクを乗り越えて変革していく、自己再帰的な「高度（後期）近代」の社会のあり方と捉える。それに対して④はグローバルゼーションを後戻りできない決定的な人類社会の変化だとして、そのネガティブな影響に対処していくためのより根本的な変容を模索している。

「時代の流れ」という表現は、制御しきれないものとしての「流れ（フロー）」という先述したメタファアのバリエーションである。この「流れ」と私たちの人生との関係を示すためにしばしば使われる表現が「船」である。私たちは、人生を航海になぞらえる。グローバルゼーションという大きな時代の流れと、私たちの人生という船の関わり方のイメージは、以下のように分かれるだろう。

第一に、その流れに徹底的に抗うという選択肢である。これは急流をさかのぼろうとするカヌー競技、あるいは流されまいとして懸命に留まろうとするモーターボートのイメージである。第二に、ある程度流れに身を任せながら、自分の行き先に到達するためにそれを乗りこなすという選択肢がある。これは、風を巧みに操り波を切って進むヨットのイメージである。第三に、流れのなかで完全に自律性を失って流されてしまうという選択肢であり、これはエンジンの壊れた漂流船のイメージである。

このうち、もともと「力」が必要なのは一番目の「流れに抗う」という関わり方である。この「力」とは個人の主体性（自分の人生に対する自己決定可能性）と、それを可能にする潜在能力のメタファアである。流れが急であればあるほど、逆らったり留まったりするには大きな力が必要である。つまり時代の変化の流れが激しいほど、それに抗って変わらせずに、動かずにいることは、個人の主体的な選択となる。ただし流れが急になればなるほど、この選択には強大な力と意思が必要である。それゆえ多くの人々は多かれ少なかれ、第二の「流れを乗りこなす」選択肢を選ぶ。だが完全に流れに任せてしまつては遭難してしまつから、慎重に航路を保つだけの力が必要である。流れのない淀みに入り込んでしまつたら、自分でオールを漕ぐ必要もあ

る。嵐に入り込まないように強引に進路を変えることも、ときには必要だ。つまり、この選択肢をとろうとするにも、それ相応の力が必要だということになる。一方、第三のように、エンジンが無力化し舵取りも不可能になり、「流される」がままに船の上から空を眺めているしかない漂流船のイメージは、グローバルゼーションという時代の流れに対する個人の無力さ、自分の人生を自己決定することの不可能性を表現している。

こうした思考から明らかになるのは、不可避な時代の流れとしてのグローバルゼーションに対処する私たちの主体性は、移動すること自体ではなく、どのくらいその移動を自己決定できるかという可能性として体験されるということである。時代に流されるという感覚を抱くとき、私たちは自分の「無力さ」を痛感している。そして、時代の流れに乗らず、抗い続ける生き方を貫いた(ように見える)人に、私たちはあたかも「超人」であるかのように畏敬の念を抱く。つまりグローバルゼーションの時代においては、自分の意思で動かずにいられる人もつとも自己決定可能性が高く、自分の意思にかかわらず動かざるをえない人もつともそれが弱く、大半の人々はその中間にいるということだ。

(塩原良和『分断と対話の社会学——グローバル社会を生きるための想像力』慶應義塾大学出版会 二〇一七年より。

出題の都合により、一部改変した箇所がある。)

問一 傍線部(1)の「国境を越える難民の激増」という現象について、本文中のメタファーを用いて、四〇字から六〇字で説明しなさい。

問二 傍線部(2)にあるように、既存のメタファーに新たな思考と表現を加える事例として、著者自身は「渦」というメタファーにどのような新しい思考と表現を加えたか。一〇〇字から一二〇字で説明しなさい。

問三 傍線部(3)について、「その中間にいる」とはどういう状態であるか。人生を航海になぞらえ、「流れ」と「船」の関わり方のイメージを用いて、一五〇字から一七〇字で説明しなさい。

III

次の文章は、明治期に著された中村秋香『秋香歌かたり』の一節である。これを読んで後の問い(問一〜問五)に答えなさい。
 なお、本文は一部改変したところがある。

(注1)
 松尾桃青が、

馬に寝て残夢月遠し茶の烟(けむり)

の句は、眉山(注2)が早行の詩の「馬上統残夢」といふ句をふみていへるなるが、「月遠し茶の烟」とうけたるにて、残月早行の景色

も、馬の背にまどろみつ、ゆられゆられ行くさまも、まのあたり見るが如く、本詩の「不知朝日昇」といへるより、遙かに

味あるを覚ゆ。小山田与清が『俳諧歌論』に、これらの句を評して、漢文を邦語にてよむが如く、なでふたはごとぞやと讒(そ)れる

は、よくも思はぬ論といふべし。

また其角が、

炭櫃(すび)さへす(注4)きに夏の炭俵

といへるは、『無名抄』に、

火おこさぬ夏の炭櫃のこちして人もす(注6)さめずすさまじの身や

とある歌より思ひよせたるなるべしと、芳樹翁がいはれしはいかか。こは『枕草子』の「すさまじきもの」に「火おこさぬ火桶(ひき)、

炭櫃」とあるをふめるにて、『無名抄』の歌とよると「ころ同じとこそいふべけれ」。

遠江なる柿園風牛は、俳句にてはその頃知られたる人なりしが、ある時、

鍋洗(注9)ふ前に三つ四つ蚩(注10)かな

といふを得て、かかる情は歌にてはいひ得がたかるべしと思ひ、石川依平(注11)に示しけるに、依平みて、「余は俳諧のことをしら

ねば、とかくの評を加ふべきならず。但し歌にては『鍋洗ふ前を』といはざるべからず。『を』といへば即ち、鍋洗ふ前を三つ四

つ蚩が飛びかふさま、言外にしらるべし。『前に』にては鍋を洗ふ前の草むらなどに居るさまにて、飛びかふさまとは聞こえぬ

なり」とありければ、嵐牛深く感じ、これより常に依平が教へを受けて俳句も大いにすすめり、と春畊氏語られき。^(注12)
また、人口に膾炙^{くわいしや}せる、

よの中は三日見ぬまに桜かな

の句、或いは「三日見ぬまの」とも伝ふ。⁽⁴⁾「『三日見ぬまに』といふ時は、『三日見ぬま』の句は、『よの中』といふにかかり、三日の間に局面の一変することを『桜かな』といひたることとなり、『桜かな』は花盛りをいへるが如く聞え、また『三日見ぬまの』といふ時は『三日見ぬま』の句は桜にかかりて、『三日見ぬうち変じたる桜』といふこととなりて、『桜かな』は落花をいへるが如く聞ゆ」と、穂積^(注13)夫人いはれき。共に面白きはなしなり。⁽⁵⁾

(注1) 松尾桃青 桃青は芭蕉の別号。

(注2) 眉山が早行の詩 宋・蘇軾の「太白山下早行至横渠鎮書崇寿院壁」という漢詩。

(注3) 小山田与清が『俳諧歌論』 小山田与清は江戸時代後期の国学者。『俳諧歌論』は、『古今和歌集』に見える「俳諧歌」から始めて、俳諧について論じる書。

(注4) 其角 俳人。芭蕉の門人の一人。

(注5) 無名抄 鴨長明による、和歌についての書。

(注6) すさめず 心引かれることがない。

(注7) 芳樹翁がいはれし 芳樹翁は江戸時代後期の歌人・国学者、近藤芳樹。引用されているこの部分は、その著書『寄居歌談』巻三に見える。

(注8) 火おこさぬ火桶、炭櫃 『枕草子春曙抄』などによる本文。「火おこさぬ炭櫃」などとする本もある。

(注9) 柿園嵐牛 江戸時代後期の俳人。

(注10) 鍋洗ふ前に三つ四つ蚩かな 本文では嵐牛の句とするが、作者未詳の句として「米洗ふ前に蚩の二つ三つ」という形でも知られる。

(注11) 石川依平 江戸時代後期の歌人。

(注12) 春畊氏 未詳。

(注13) 穂積夫人 明治期の歌人、穂積歌子。

問一 傍線部(1)「なでふたはことぞち」を現代語訳しなさい。

問二 傍線部(2)「よるところ同じ」について、何と何が、どのように同じであるというのか、説明しなさい。

問三 傍線部(3)について、なぜ『鍋洗ふ前を』といはざるべからず」と言うのか。「前を」とした場合と、「前に」とした場合とで、「言外」に感じられるものが、どのように違うのかを示しながら説明しなさい。

問四 傍線部(4)について、『よの中』といふにかかり」とある「かかり」が、文法的に言う「かかる」(修飾する)ではないことに注意して、どのようなことを言っているのか、説明しなさい。

問五 傍線部(5)「共に面白き」と言っているのは、どのようなことと、どのようなことが、どのような共通点をもつ話として「面白き」と言っているのか、説明しなさい。